

# 介護保険 10年

## 県内の現場から

▷▷2

「母は1分前のことも忘れてるようになった」。富士市の介護事業所「2人3脚」を訪れた同市石坂の名倉政子さん(64)は、折り紙に没頭する母勝代さん(91)を見詰めた。

「え?」。違和感を覚えたのは、同居を始めて2年ほどたった2003年ごろ。スパーに行く、勝代さんがリヨンやシヤケばかりをかごに入れた。「あの時はもう症状がはじめていたのかも。知識があれば、もっと早くどこかに相談していたのに」。政子さんが感じた異変は、進行する認知症のシグナルだった。

### 浸透しない理解

高齢化の進展と比例するように認知症患者の増加が続く。ところが、認知症自体へ

## 増える認知症患者

の理解は浸透していない。まだまだ「病気ではない」と考えられ、治療が遅れているのが現状」。認知症の療養病棟で働いた経験を生かして「2人3脚」を設立した看護師の石田友子ホーム長は、そう指摘する。

2人3脚を利用する同市の小島民夫さん(74)「仮名」は不眠とうつ状態に悩まされ、08年秋から心療内科に通い始めた。09年には「死にたい」と言っただけの家の前の道路に飛び出したり、深夜に線路や海岸沿いをさまよったりした。近くに住む長女(48)は「母と必死に止めたり、捜し回ったりした。誰にも助けってもらえず



迎えに訪れた政子さん(右)に、折り鶴を見せる勝代さん(中央)。石田ホーム長を交えて談笑した  
—富士市の「2人3脚」

# 異変逃さず治療早期に

つらかった」と振り返る。かかりつけ医を別の病院に替えた矢先の同年夏、小島さんは初めて「アルツハイマー」の診断を受けた。時計の針が

読めない。自分の名前さえ書けなくなっていた。「治療やデイサービスに通って脳を刺激すれば、症状の進行を遅らせることができ

〈文庫〉認知症は、脳疾患などで知的能力が低下した状態をいう。根本的な治療法は確立されていない。約40%を占めるアルツハイマー型は、老化に伴って現れるタンパク質の一種「ベータアミロイド」が脳内に蓄積して15〜20年で発症するとされ、加齢と密接に関係している。県の推計によると、09年の県内の認知症高齢者は7万2千人。要支援、要介護認定者の59.9%、全高齢者の8.3%に相当する。

る。症状が悪化してからは、向上研修」の修了者は、09年度末で約530人に達した。国は、認知症を学び地域で患者や家族を見守る「認知症サポーター」の養成を続ける。県内の登録者数は4万4027人(同年12月末)に上る。介護保険制度が始まってグループホームなど、認知症を患う高齢者を受け入れる施設の整備は進んだ。「2人3脚」のように24時間を通して介護サービスを提供する「小規模多機能型居宅介護支援事業所」も増えている。「ちょっとおかしい」という異変を感じ取り、いかに早く認知症に気づくか。高齢者に注がれる地域の温かいまなざしを育てる取り組みが今、欠かせなくなっている。

### サポーター養成

症状をいち早くかかりつけ医に発見してもらうため、県が進めている「認知症対応力

気付くか。高齢者に注がれる地域の温かいまなざしを育てる取り組みが今、欠かせなくなっている。